「現代かなづかい」表記についての一調査

―その習得をねがって―

伊東祐博

はじめに

「現代かなづかい」は、昭和二十一年に制定されたというから、すでに十六年たったわけだ。この間、小学校から高等学校・大学まで一貫してこの方式で表記が指導されてきた。だが、この「現代かなづかい」に対して、いろいろな立場から、反対論また批判論が提出されていることも周知のことである。「国語学辞典」の林大氏の記述によれば、それは三種に分けられ、

(1)従来の慣習を破ることについての反対。

(2)現代かなづかいの内容についての反対。

(3)現代かなづかいの制定実行の手順についての反対。

であるという。とりわけ、昨年、福田恆存氏が「私の国語教室」という著書で具体的に示された「現代かなづかいの不合理」が、諸方面に大きな反響をよんだことは、まだ耳新しいところである。私どもが、そういう反対論・批判論をみるとき、たしかにいろいろな「不合理」を知らされる。「現代かなづかいは・現代語音にもとづくゞとありながら、実際にはこれほどまでに徹底していないではないか」と示されると、なるほどと思う。

しかし、教育は「現代かなづかいの本則」に従うものとされ、また法令・公用文・教科書・新聞・雑誌などにも、現に実行されていることを思えば、私どもが反対論・批判論に拘泥していることは必ずしも正しい態度とはいえないと思う。私どもには、現代の学習者をして、将来の社会人として「現代の国語をよみ・かきするに十分たえうる能力」につちかわしめる義務がある。

ひるがえって、現在の高校生の実態はどうか。普通教育の完成段階としての高校生、それも「現代かなづかい」で育ってきた高校生が、どれだけ「現代かなづかい」を使いこなしているか――調査した結果を報告させていただきたいと思う。

調査日時＝昭和三十七年十月二十六日
調査対象＝松江工業高校機械科三年四十八名（本校ではよくできるとされているクラスである。）
調査方法＝次にあげる、十の文を、私が文節ごとに音読し、すべてをかなで書きとらせ、考えなおした上で清書させた。

1　きょうのゆうがた　おおきなじしんがあって　みのちぢまるおもいがした。
2　ねえさんと　じゅうにけんどうろを　とおりかかると　せいざいこうじょうのほう へむかって　おおぜいの　ひとがかけていった。
3　これにたいしては　いくとおりものかんがえかたができるだろうが　なるべくおおづかみにかんがえることもひつようだ。
4　かれは　いちにちじゅう　べんきょうづくえにむかって　かんそうをつづっていたが、そのしんぼうづよさに　きょうたんした。
5　いかにがまんづよいわたくしでも　すこしずつなまづめをはがされてゆくときだけは　とうとうがまんできず　とじためからはなみだがあふれてきた。
6　たびはみちづれとよくいうが　てづくりのべんとうをもってたびをつづけるたのしさも　またかくべつである。
7　さいきんはぜんぱんてきにえいせいじょうたいがいちじるしくよくなって　とおいがいこくからきたきゃくにも　あまりふゆかいなおもいをさせないですむという　じしんがつくようになった。
8　とおぐらいのおんなのこが　ほおずきをふくらませている。
9　おおきなおおかみが　こおったこうやをとおっている。
10　おおむね　りょうこうなけんこうじょうたいです。

これらの文例は、文部省編「国語科学習指導法（表記編）」におさめられ、中学校の生徒を対象に調査されたことのあるものに、問題となりそうなものを加えたものである。

一　正しい表記の割合

それぞれの文について、正しい表記、誤った表記を、それぞれ人数で表わすと次の表のごとくである。「誤り欄」の「1～3」は、それぞれの個数誤ったものである。

文番号	正	誤 1	誤 2	誤 3
1	30	14	4	
2	12	19	14	3
3	12	21	12	3
4	39	7	2	
5	12	34	2	
6	37	10	1	
7	18	28	2	
8	2	14	25	7
9	16	24	5	3
10	29	19		
	209	190	67	16
		273		
				480

ただ数字だけをあげても無意味であるかもしれないが、全体の見通しをつけるためにまとめてみた。その正しい表記をしたものの割合は、四十三％で、はなはだしく不本意な結果であった。
また、全体を通して、誤表記なしというものは皆無で、二個－二名、三個－五名、四個－三名、五個－四名、という

結果であり、概して成績のよい者というより、注意深い性質の者がよい結果を示していた。このように不本意な結果であったのは、先の文例が「現代かなづかい」の中でも、その表記のしかたがまぎらわしいものを含んでいたということも、おおいにその原因となっているであろう。とはいうものの、それとそが「現代かなづかい」の要諦であるといえようから、この結果にはやはり注目せねばなるまい。

以下、その間違いのとくに多かったものをあげて考えてみたい。

二　オ列長音の表記

いわゆるォ列長音について、「現代かなづかい」は次の三種の規定をもうけている。

①ォに発音される従来の「ほ」は「お」と書く。〈細則9〉
②長音の場合は、ォ列のかなに「う」をつける。〈細則12〉
③従来の「を」は、助詞「を」を除き、すべて「お」と書く。〈細則1〉

オ列長音については、②に属するものが大部分で、①は「おおきい↑おほきい」など十八語、③には「とお↑とを（十）」などが属する。

これらについての結果は次のとおりである。（語頭の数字は文例の番号、矢印の次の数字は四十八名中誤記した人数である。）

①に属するもの

1 おう|きな　↓9
2 おう|ぜい　↓17
3 おう|づかみ↓15
9 おう|かみ↓21
10 おう|むね↓19

②に属するもの

2 とう|りかかる↓26
3 いくとう|り　↓32
9 とう|っている↓11
7 とう|い外国　↓4
8 こう|った（氷った）↓2
9 ほう|づき　↓19
（ほう|ずき9を含む）

③に属するもの

8 とう（十）↓35

この結果をとおしてみると、大体において②の通則は理解されているといえる。②に属する四つの誤記例も、こういう調査をやるという特別な意識のもとで生まれたものとみることができると思う。ただ問題となるのは①・③の、いわば「例外」ともいうべき点がはっきりおさえられていない点である。これらのコトバについて、生徒のほとんどがはっきりした意識をもっておらず、むしろなぜ「お」と書かねばならないのかという疑問をもっている。この疑問は当然でてくる疑問であると思われる。「現代かなづかい」がもとづくとした「現代語音」においては、②群と①③群とのコトバはぜんぜん区別

されていない。ただ区別されるのは「歴史的かなづかい」の表記においてである。したがって「現代かなづかい」に、①③の細則がはいってきていることは、たしかに「歴史的かなづかい」との妥協であるといえるだろう。福田恆存氏はこの点について「〝現代かなづかい〟を正しく書き分けるために歴史的かなづかひの知識を必要とするといふことになります。」といっておられる。それはともかくとしても、①③に属するものは機械的に記憶しておくよう、つねづねから指導しておかねばならないところであろうか。なお、「氷った」については、誤記が二例あるが、別に行なった一年生四十四名を対象とした調査では、「氷」の表記において「こうり」という誤記が二十例でてきた。

三　「じ」と「ぢ」「ず」と「づ」の表記

これについては、次の趣旨の規定がある。

①「じ」「ず」を使うのを本則とする。
　＜細則3＞
②二語の連合によって生じた「ぢ」「づ」は、そのまま「ぢ」「づ」を用いる。＜細則3－ただし書き(1)＞
③同音の連呼によって生じた「ぢ」「づ」は、そのまま「ぢ」「づ」を用いる。＜細則3－ただし書き(2)＞

これらについての結果は次のとおり。

①に属するもの
1 ぢしん　↓12
4 一日ぢゅう　↓1
5 すこしづつ　↓33
5 とぢた　↓1
7 いちぢるしく　↓27
8 ほおづき　↓30

②に属するもの
3 おおずかみ　↓7
4 べんきょうずくえ　↓4
4 しんぼうずよさ　↓3
5 がまんずよい　↓2
5 なまずめ　↓2
6 道ずれ　↓1
7 手ずくり　↓6
　　↓2

③に属するもの
1 ちじまる　↓1
4 つずる　↓2

以上の数字が示すものは、この項目の表記については、まずまず及第ということであろうか。規定②のことも、③のことも、まずおさえられていると考えてよさそうだ。生徒個々にあたってみても、「二語連合－語源」ということは、はっきり意識していることがわかる。ただそれがはっきりしすぎていたために、それとも漢字を連

想して、つい本則を忘れてしまったためか、「ぢしん」が十二例あったことを見逃がしてはならない。

だが、ここでさらに注意したいのは、書かせたコトバが、その語源意識において比較的明瞭なものであったということである。事前の予備調査として、語源意識の不確かなものーーしかし国語審議会が、語源意識ありとして「ぢ」「づ」と表記すべしと示したもの（たとえば、こづかい・ことづて・こぢんまり・ひづめ……）を含んで、「うなずく、つまずく・いなずま・ひざまずく」などを加えて、行なった調査の結果は、かならずしも満足なものではなかった。あるものは語源の分析をし、あるものは一つのコトバであるとして表記していた。

こういう語源意識ということについて、福田恆存氏は痛烈な批判をしておられるが、上記のような結果からしてみると、たしかにその批判はあたっているように思え、語源意識は人によってマチマチである。生徒が文章を書くいろいろな場合に、審議会によって示された基準案にいちいち照らし合わせてみることは容易ではない。しかし、これが望ましい形である以上、私どもはそのように指導すべきであり、また、そういう境界線上にあるコトバについては、おりにふれていろんな形において注意を喚起しておく必要があろう。

なお、「すこしずつ」「いちじるしく」の表記について、相当の誤りがでたことは驚異であった。「国語科学習指導法（表記編）」の中学校対象の調査でも五十二～五十八％の誤答があったが、それとくらべてむしろ高率なのはなんとしてもさびしい。規定③との混同であろう。後者はともかくとしても、前者ははっきりおさえさせなければならない。「ずつ」と書く根拠、いいかえれば「同音連呼」ではないという根拠はともかくとして、よく使う助詞ではあり、「現代かなづかい」では「ずつ」と書くことになっているという理由でーー。＜「いちじるしい」は、歴史的かなづかいでも「じ」を使っているので、もとのままの表記である。＞

四　助詞「は」「へ」と「いう」の表記

この表記は、「現代かなづかい」の中でも、もっとも有名な項目なので、さすが生徒もはっきりおさえているようである。＜細則4・8・6＞

それでも

2方え→8　　5ときだけわ→1

4ぼくわ→1　　6よくゆうが→4

という結果がでた。高校三年になってもまだ、という感もするが、これこそ代表的な「例外」であり、歴史的かなづかいへの門戸でもあるので、どうしても根絶したいところである。

五　エ列長音

＜細則11＞に「エ列長音は、エ列のかなに〝え〟をつけて書く。」とあり、また、安藤正次氏による「現代かなづかいに関する主査委員長報告」に、「長音のうちで問題となるべきものは、エ列の長音の場合であります。この場合のものは国語ではまれであります。『永遠』『経営』のごときは、エイ・ケイ・エイであるから、そのとおりエイ・ケイ・エイと書くのを本体といたします。」とあることに

よって、その表記がきまっている。

これに関しては、わずか一名の誤答で、あとは完全に「ねえさん」「えいせいじょうたい」の表記をマスターしていた。

おわりに

「現代かなづかい」による表記の習得については、現行指導要領では、小学校の段階で完成されることになっている。

＜第二学年＞かなづかいに注意すること。

＜第五学年＞かなづかいに注意して正しく書くこと。

一応右のように目標を設定しており、その指導がなされている。

中学校では、この部分に関しては、

＜第一学年＞当用漢字別表の漢字の全部が書けるように努め、表記のしかたに注意し、くぎり符号などを正しく使うこと。

＜第二学年＞当用漢字別表の漢字の全部が書け、表記のしかたになれ、くぎり符号などを適切に使うこと。

となっていて、かなづかいということばをひかえて、表記の面での、広い完成習得が目ざされている。この点は、高等学校でも同じで来年度から実施の新指導要領にも、その現代国語の「ことばに関する事項」の中で、

語句を豊かにし、その意味と用法を身につけるとともに、国語の表記のしかたについて理解すること。

としており、その解説で「表記のしかたについては、小学校・中学校で学習しているが、さらに習熟させ、国語に存している各種の文字の由来や、現代の国語における表記の意義を、正しく理解することが要求される。」とその内容を説明している。

小学校から高等学校までいずれも、「現代かなづかい」ということばは直接にはでてこない。しかし、小学校における「使用」から、高等学校の「理解」まで、それぞれの段階に応じて、「現代かなづかい」の正しい表記が求められていることは間違いはない。そして、事実、この調査の対象となった高校三年の生徒も、そういう表記をうけてきた。

しかし、いままでの報告がその一面を伝えているように、その完成の度合いはけっして満足すべきものではない。もちろん、現代の国語文は「かな」ばかりで書かれることはないだろう。多く漢字まじりで表記され、「現代かなづかい」を知らなくてもさほど不自由はないといえるかもしれない。だが、それは知らなくてもよい、完全に習得する必要などない、という理由にはならない。すぐれた、一人前の現代国語人として、日本語生活人として、そしてそれは将来に来たるべき「正書法」決定に際しての有意志人として、かならず知っていてほしい、いや知っていなければならないことだと思う。欲をいえば、歴史的かなづかいをも知っているにこしたことはない。だが、最低「現代かなづかい」——現在、現に行なわれていて、批判も正当性もなくはない——を習得させておきたいものだ。

「現代かなづかい」の指導は、それだけをきりはなしてなされることは意味のないことだし、生徒に「いまになってなんだって。」という感を起こさせぬでもない。作文を通して、書写を通して、さらに古典をやる場合に、いろんな機会をとらえて指導されねばならない。もちろん機械的な記憶——むろん理解を裏づけにして——を要するところもあろう。その具体的な計画は、私自身もっと深め

てからご教示いただきたいと思う。

いったいに、このたびの調査ではからずも確認しえたことの一つは、「文字を正確にに、キレイに書こう」という意識が、明確にはたらいていないということである。書くことは、後に利用するためのものであるということ、また他人に読んでもらうことを予想してのもの、ということがはっきり表面に表われていないようである。以前からそんなことに気づくたびに注意してきたが、他の現場ではいかがであろう。書くことの三要素は「正・速・美」であるといわれるが、すくなくとも「正」だけは達成したいと思う。そして「美」とまでゆかなくても「キレイ」だけは——。

《37・11・18》

（広島県三原高等学校教諭）